

波

山本有三

なみ
波



定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 60 G

昭和二十九年九月十五日 発行
昭和四十二年十二月十日 二十六刷改版
昭和五十三年十二月十五日 四十六刷

著 者 山^{やま}本^{もと}有^{ゆう}三^{ぞう}

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式會社 新潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

波

山 本 有 三 著

新 潮 社 版

波

目次

妻		七
子		一三
父		二六一

解説 福田清人 三四五

波

妻

一ノ一

行介(コースケ)はいつもの停留所でおりました。おりるとき、帽子に手をやらなくてはならないほど、風が強かった。

彼は赤っ茶けた風に押されて歩いて行つた。ときどき、紙くずや、こつぱなぞが、トンボがえりをしながら、彼のズボンのあいだをすりぬけて、ころがって行つた。

行介はオーバーのえりを立てていたけれども、それでも、カラーの下まで、つめたい空氣が流れこんできた。そのうえ、どうかすると、クギでも投げつけられるように、おお粒の砂がパラパラと、彼のえり首に落ちてきた。

彼は、横丁にはいったら、いくらか風がよけられるだろう、と思った。急いで、うちのほうへ曲がる最初の横丁を曲がった。しかし、しばらくしてから、「きようは寒いから、帰りに肉でも買ってこよう」けさ、出がけに、妻にそう言ったことを思いだした。

そうだ。肉を買って行ってやらなくては。彼は、また電車どおりに引返して、突きあたりの肉やにはいった。

板まえが肉を切っているあいだ、行介は厚いマナイタの前に突っ立って、ホーチョーの動くさまをぼんやり追いかけていた。なま肉のにおいが鼻を打って、彼の胃ぶくろを驚くほど波だたせた。

マナイタの上に斜に落ちているゆう日が、鋭い刃ものにあたって反射すると、ちようと油でもはねた時のように、天じょうや、肉をぶらさげてある大きなガラス戸ダナに、きらっ、きらっと、ちいさい光をはねかせた。

突然、ふわっとしたものが、ひざのあたりにからみついた。彼はびっくりして下を見た。ふる新聞が風に吹きまくられて、飛んできたのだった。なんのことはない、木の根かたに落ち葉が吹き寄せられるように、彼の足もとは、一時の吹きだまりになったのだ。

「こんなところに突っ立っていると、ざまがないや」

心の中でつぶやきながら、彼はいまいましそうに新聞を往来にけとばした。しかし、べつとりと張りついたようになって、ふる新聞はなかなか足から離れなかった。彼はしかたがなしに、ほこりだらけの紙を指でつまんで、かざしにも放してやった。ぼろぼろに破れた、大きな紙きれは、また往来をころがって行った。

肉やの店さきに立つたびに、いつも思うことだが、どうも、この、待っているあいだぐらい、まの悪いものはなかった。

板まえは切った肉を竹の皮の上に薄くのばして、丁寧にならべていた。それから、ハカリの上に載せて、少しばかりの肉をたしたり、へらしたりしていた。行介はお預けをくった犬のように、黙ってそれをながめていた。

「見並（ミナミ）君」

肩のところで声がした。ふり向くと、一つのえ顔に突きあたった。園田（ソノダ）だった。

行介はちょっとしよげたが、向こうが笑っているの、彼もてれ隠しに、ほほえんで見せるよりほかはなかった。

「ごちそうだな」

「いやあ、とんだところを見つかっちゃったな」

一ノ二

「あい変わらずだね」

園田の顔には笑いがまだ残っていた。

「何があい変わらずだい」

行介はおつかぶせるように言った。「あい変わらずのろいね」「あい変わらず女房孝行だね」「あい変わらず……」園田のあい変わらずに負けていたら、どんなことになるかわからない、と思った。

「いや、あい変わらず気がきいてるってんだよ」

「ふん」

「おれがくることを察して、牛肉を買っておこうなぞは、感心だよ」

「たぶん、そうくるだろうと思っていた。おい、心配しなくてもいいよ。君にはコマ切れをたくさん買っておいた」

「コマ切れ、コマ切れか」

「何を言っているんだい。みっともない」

「おい。——女房にコマ切れを買って帰りけり。ってのは、どうだい」

「どうもうるさくってかなわないな、迷句をひねくるやつが、そばにいと」

「しかし、実感があってなかなかいいだろう」

「うん、たびたびコマ切れを買いつけてると見えて、その点はさすがだね」

「まだあんなことを言ってやがる。もういい加減に降参しろよ」

「はははは」

「お待ち遠さま」という声が響いた。そして、竹の皮づつみが行介の前に突き出された。彼はそれを受け取ると、園田とつれ立って肉やの店を出た。

「だが、ぼくがあすこにいること、よくわかったね」

「なあに、君の姿は三丁もさきからわかっていた」

「どうして」

「ぼくはこの道をやってきたんだもの、つきあたりの店に、君の丸まった背なかが出っぱっていや、いやでも目につくじゃないか。おれは道々考えてきたんだが、どうもなんだね、ネコ背つてやつは、なかなか句になりにくいね」

「バカにするな。じゃ、君は、ぼくのところへ行ったのかい」

「うん、もう帰っているころだと思って」

「それなら、待っていてくれればいいのに」

「おれもそうしようと思ったんだが、だれもいなかったもんだからね……」

「かまやしない。あがりこんで待ってりゃいいじゃないか。ほかのうちじゃあるまいし」

「ところが、戸がしまっているんだ。引っぱってみたけれど、あかなかったから、しかたがない、帰ってきたのだ」

「そうか、そりや失敬した。じゃ、女房、どっかへ買い物に出たんだろう」

きようは土曜日だし、ちようど園田もやってきたところだから、久しぶりでひと口やりたいと思って、行介は途中、取りつけのさか屋に寄って酒を頼み、うちに帰った。うちは、園田が言うように、戸がしまっていた。妻はまだ帰っていないらしい。彼は裏ぐちにまわって、あま戸のかけ金をはずした。

一ノ三

なかは まっ暗だった。

行介は手さぐりで電燈を探し、スイッチをひねった。それから、急いで玄関に行つて、格子（コーシ）とあま戸をあけた。

「いや、お待ちどお」

「ほんとうにお待ち遠さまだ。なんだね、肉やのマナイタの前に立たされるのも、いい図じゃないが、戸のしまったうちの前に、ちよこなんと突っ立ってるのも、あんまりありがたいもんじゃないね」

園田は、へらず口をたたきながらあがってきた。

行介は、なが火バチの横にすわろうとすると、煮えたぎった鉄ビンが、重たいフタをパタリパタリ押しあげているので、彼は立ったまま、あわてて鉄ビンをわきにおろした。「戸じまりをして、外に出て行くくらいなら、火をいけて行けばいいのに」腹の中で、彼はるすの妻にこごとを言った。

しかし、じつを言うと、赤とおこっている火は、吹きつつあらしの中を、冷えきって帰ってきたからだには、この上もなくうれしいものだった。ふたりは火バチの上に手をかざしながら話し合った。

園田がやってきた用むきは、金のことだった。まだ来月と思っていた細君のお産が、急におとといあったものだから、てんてこ舞いをしてしまった。で、五十円か、三十円ばかりほしい、と言うのだった。ふたりは、しょっちゅう、このくらいの金を貸したり、借りたりしている仲だった。園田はずぼらのように見えて、案外かたい男で、金銭でまちがいのあったことはなかった。ことにおもしろいのは、それを返しにくるとき、味の素だとか、塩せんべいだとか、その利息に相当するくらいのものを、いつもきつと持ってくることもあった。行介も、借りたときは、やはりそうすることにしていた。

園田の話は事情が事情だし、それに、ちょうど三十円ばかり手もとにあったから、さっそく用だてることにした。行介はその話が一段落つくと、台どころに立って行って、ネズミイラズだの、戸ダナだのを、しきりにガタピシいわせた。

「何を見つけてるんだい」

「おかしいな。どこへしまいこんじまったのかしら。どうも女房がいないと、しょうがないな」

「おい、ごちそうなら、また、ゆっくりなりにくるよ」

「まあ、そんなことを言わないで、ぼくがせっかく買ってきたんだから、肉を突っついて行けよ」

「しかし、奥さんがいないところだからね……」

「きょうはバカに遠慮するじゃないか」

「そういうわけでもないが、金を借りたり、ごちそうになったりしちや、少し話がうま過ぎるかな」

「いやなことを言うやつだな。そんなことを言ってるひまに、いいから酒でもつけといてくれよ」

今しがた小僧が持ってきた酒のトックリを、園田の前に押しやった。

「驚いた。細君が、るすだと、おれのほうにまで雷がおっこってくる」

「つまらないことを言うなよ」

「しかたがない。細君が帰ってくるまで、おかん番をつとめてやろう」

「それだ。恩をきせてから飲もうってんだから、君は太い料けんだよ」

「なに、そんなことはありやしないが……」

「ナベ、ナベ、ナベと。いったい、どこへ入れちまやがったのかな」

「なんだい、牛ナベかい」

「うん、困ったな。ここになければと——」

「そのぐあいじゃ、ここのうちでは、めったに牛肉なんか食わないと見えるな」

「飲まないさきからその調子じゃ、飲んだら何を言いだすかわかりやしない」

「おい、いったい、そんなに飲ませるつもりかい」

「すぐそんなことを言う。だから、酒のみはいやしいってんだよ」

「そうものをはっきり言うもんじゃない。酒がはいらないうちに、まっかになってしまいうじやないか」

一ノ四

「へんなもんだな。自分のうちでいながら、台どころきたら、どこに何があるんだか、さっぱりわかりやしない」

「実際なんだね。いるときには、さほどにも思わないものだが、いないとなると、これで、不自由なものだね」

「おい、つまらない親切なんか、よしてくれよ」

「だが、そういうもんじゃないか、いったい、細君なんてものは……」

「あった、あった。なあんだ。こんなところに突っこんであつたんだ」

米ビツの横に二寸ばかりあきがある、その狭いあいだに、牛ナベはむき出しのまま立てかけて